

於

鄆

昭和改訂版
肉十八

特 260
153

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
30 1 2 3 4 5

始



邯鄲

(梗概) 唐土蜀の國に盧生と言へる者、楚國の羊飛山に聖僧住めりと聞
 き身の一大事を尋ねん為め同國に赴き、邯鄲の里なる一旅亭に入りぬ。
 亭の主の勧めにて夕餉の栗飯を炊ぐ間名高き邯鄲の枕にて一睡しぬ。
 稍あて楚國の王位を譲るべしとの勅使現れ、盧生を玉の輿に戴せて
 尊導する、あたりの光景喜見城も斯くやと思ふばかり壯麗華麗を極め
 程を大臣來の七十年の齡を保つべしと言ふ天の濃漿と沆瀣
 授け小童の舞ひ興するに兼ドて其身も立ちて舞など一晝夜四季の
 別れな日夜の宴樂はや五十年を経一と思ふ頃忽然とて宮殿樓閣百
 宮卿相を始め物皆一時に消え失せて夢覺めぬ、折節亭の主夕餉を仕度
 して待居たり、盧生茫然自失の体なりがつらく世上の事を思ふに
 萬事は一炊の間の夢なり、此枕こそ出離を求むる智識なれどて羊飛山
 にも行かず望みを叶へて歸りける。

子シテ
方 舞人
ワキ
ワキヅレ
立衆
季所 唐土邯鄲の里
不 定

敢
次第
浮世の遊は健ひすて
上夏秋をい
つと定めん
上抑是ハ蜀の國也
傳よ盧
生とす者あり
口詞人間よゑあぐト仁乃
をとも取ふも
上唯忙忙とぬ
下ト事に計あり
誠や楚國のやうひきんふトもとぞ知識乃
羊
飛
山

はまにゆすひてゆ程よ、^{ハシ}是れ一大事
をもろんる。と今やうひととあゆむ
上二二トリニ 佐割^ト國を雲梯の役^トとす^キ
ひ又山を越^トすまばそこと一もあき抜^チ
理^トくき山^トくれ里^トをとあらのま^ト 那^ト
鄭乃里^トはと早^トくま^トゆく^{セリ}有^フ

詞
家^ト是^トいはず及び^ト那敷^トの枕^トなは^ト。
是^トは^ト孫更^ト首途^ト乃^トせ比^ト祇^トよ^ト是^ト乃^ト告^ト天^ト
のあかる事^ト旅^トへ^ト 一村^トああも^トと^ト
ま^ト 月^トも^ト残^トる中^ト富^ト乃^ト夜^ト寐^ト
是^トを^トあやと^ト敢^ト勦^ト北^ト海^トよ^トは^ト
三^ト わき

月城の樂^{アラシ}をかくやと思ふ才北^{サカイ}、た
中^{ヤア}歩^{ハシ}千顛^{チハシ}万顛^{マハシ}のみぬく^{ムク}の數^{スズ}もば
らね^{ラニ}、捧^{ハシマ}相^{ハシマ}、戸^{アス}ま戸^{アス}の旗^{ハタ}乃^ナ脚^{ハタ}
小^コ色^{コロ}め^メキ^キ地^ジよ^ヨひ^ヒく^ク籍^{ハタ}比^{ハタ}あ^アむ^ムお^オび^ビく^クス^ス
リ^リ、ミ^ミニ^ニウ^ウ、^{上ト}引^{ハシマ}て^テ引^{ハシマ}、^{下ト}引^{ハシマ}て^テ引^{ハシマ}
ヤア 東^ヒに^ニ二十^ニ丈^メよ^一根^{ハシマ}の山^{ヤマ}
金乃^ヒ日^ヒ漏^ルと^ト出^{ハシマ}さ^{ハシマ}き^{ハシマ}り
ヤア 金乃^ヒ日^ヒ漏^ルと^ト出^{ハシマ}さ^{ハシマ}き^{ハシマ}り

とありよ二十余丈に 金比山をつゝせまゝ
銀乃羽シルバーハイをもせられたるをもとへを是より
長生殿の裏ヤマニシタより秋を嘗め不老
門乃前ヤナギノミツツク日月ヒマツまたといふをもあが
まくすり いふに考アリすやべき事ハシメのゆ

そとも何事ハシメ 侍候よつまひても

予、ふ十年ある、能くばは仙薬アリマツをアリマツま
めく、ばは年ハシメ、ごよ歲ハシメとたもち病アリマツ、
お宿アリマツ小天アリマツの漿カウガイや、流瀉アリマツの薫アリマツ、是アリマツと持て
あり、とアリマツ持アリマツとそく乃漿カウガイと、是アリマツ仙
藥アリマツ酒アリマツの名アリマツあり、うかいのよいとす
事アリマツ、固く仙家アリマツ也アリマツなり、すぐ

七

五

おほきの酒を代々とく葉の酒
葉を乃まかむよ
大國ニニニノトニテ人ニ
君と豊子氏
うづき

國士安全歸久の
常也色殊博ふ

其處もかくやんとやもなれやりよとひ
立ばるゝ有的比よあすとなき樂モサ
葉花さと葉櫻ふも實ばトアガルき樂
いつあるぞ 指し川とぞ 葉ものあるも
トキナムアムク 上 指し川とぞ 有的
ノ苗 指し川とぞ 有的
の月 月人男の舞あれハ 玄北葉神

をまぬつ鶴びのあを やうとあめ
もぐく月 日暮ヌおもぬけくありて
あうと風へば 着ふなり 着かどぞ
を月又さやけ まの花さけば
そ紅葉ともあく 里へば もも
ゆつ 里季おなづの前ほくま夏

廿九日もかくやんと
立はうす育め比よ重と
紫苑すと紫耀ふも実げよや乃^ノぎき
いつまぐそ 一拍子 いづくとぞ、紫ものあゑも
ミミで 二二二二二二二二
とまくわゆく 一拍子 おいくぐく 一拍子
の月 月人男の舞あれば
雲比葉袖

あまぬる鶴ひのあをヤラ
もぐの肩アシ
因ウニ又アリゆけルありてル
元ハシ二ヒ三ミ四ヨ五ゴ六ロク七セブン八ハチ九クシ十トモ
朝アサヒと晝ハタケより
夕ハヤシと暮ハシマから
月ツキ又アリあけル
里アシまの花ハナさけル
と紅葉レバとあまくル
里アシ夏アマりと晝ハタケと
寝スルと、
四季シキおとこに因ウニの景シテまく夏アマ

秋多の方すもすすむを一時よ若狭守り西
白やぬまもああ歩危かくて時色比キモキ
をすくふ十年の掌もももつキテ諦め
喜比うちなれ、女侍更衣百官卿湘
千戸万戸、淀數養属官殿樓答
をきさんと失果くみつる勘鄭の

松乃よに眠里の裏ハ、けめふまより 太
上_木 やくまひ草葉_ア 五十北志秋乃_ア
紫花も匂ふよは忙然と起あぐまそ_ア
けをうまお下り_ア 女侍更衣乃_ア
あゆゆ_ア 松風のあらざり_ア 宮_ア
殿樓答_ア 只勘鄭乃候比宿_ア 當_ア

あづまきもあ十年の歌樂もよきよな
きが是ひと形さまを、の事も一物比夏
て、ト、二、三、ト、六、三、四、
菊も二宵もむこそ室、よ、思へば
出籠を求は、知識よりは枕あり、寢あり
が、や歎歎の、家有難や歎歎北、曾の
世ぞと惜り得て、重み叶へてゆりゆり

廿

十六

昭和九年六月廿五日印刷
昭和九年六月三十日發行

定價金五拾錢

東京市下谷區上根岸町八十二番地
著作者 寶生 新

發行兼印刷者

江島伊兵衛

發行所 下林寶生流謙本刊行會

有所權忙著

終

